

東京都現代俳句協会創立 35 周年記念俳句大会
「ふるさとテレビ賞」

太平洋がうしろにあって髪洗う 板橋区 小高 沙羅

平成30年5月26日(土)、文京シビックセンター・スカイホールで盛大に開催された東京都現代俳句協会(松澤雅世会長)の創立35周年記念大会に来賓として出席させていただき、「ふるさとテレビ賞」のプレゼンターを努めるとともに、懇親会において即興で来賓挨拶を行いました。

廣井の挨拶の要旨は、次のとおりでした。—————

創立35周年、おめでとうございます。

特に、小高沙羅さん、おめでとうございます。

NPO 法人ふるさとテレビの「お国自慢ふるさとコンクール 俳句の部」は、現代俳句協会会長でいらっしゃった故松澤昭先生に選者をお願いし、その後、松澤雅世先生に引き継がれ、皆様のご協力により、毎年恒例のお祭りの行事として発展してきました。松澤昭先生をお願いしたとき、「君がボランティアでやっているのだから、僕も引き受けましょう」と言われたことが、思い起こされます。

現代俳句協会会長・中村和弘先生が、大会のご挨拶でさりげなく言われた「俳句の底力(そこちから)」、「俳句は平和の詩」であるのご指摘に大変感銘を受けました。これをお聞ききして、哲学者の鶴見俊輔先生の言葉を思い出しました。「俳句は、第二芸術ではない。最短であるからこそ、インスピレーションによって世界の人と人を結びつけることができる世界最先端の詩である」という趣旨だったと思います。俳句は、「対話の詩」、もっと言えば、「ポリフォニー(多声音楽)の詩」であったのです。先程、現代俳句協会副会長・対馬康子先生が、中村会長の言われたように俳句が55か国に広がっているが、俳句団体、俳句結社がある国は日本だけであり、そこから俳句の底力が出てくるとおっしゃったことにも通じます。俳句は、「座の文芸」です。これを大切にしたいと存じます。

ふるさとテレビは、今後とも、俳句の裾野を広げるために頑張ります。

俳人の皆様、プロの俳人の先生方が、俗に根ざしつつ高い境地の俳句を開拓され、ふるさとテレビに対し、一層のご指導、ご協力をいただきますようお願いし、お祝いのご挨拶といたします。(ふるさとテレビ俳句担当理事 廣井和之)